



ボッチョーニ《空間における連続性の唯一の形態》1913年

2024年度 鳴門市ドイツ館 ドイツ館開館30周年記念 板東俘虜収容所特別講座 特別講師：東京大学 土肥秀行先生

この講座では、板東俘虜収容所に関する歴史や捕虜たちの文化活動について学びます。今年度は、特別ゲストとしてイタリア文学研究者の土肥秀行先生をお迎えします。土肥先生は、第一次世界大戦時のイタリア戦争捕虜による「収容所文学」を研究しています。今回は、板東俘虜収容所のイタリア人捕虜と戦争の複雑性と矛盾について講演していただきます。ぜひご参加ください。

日時 11月23日(土) 13:30～15:30

板東俘虜収容所と戦間期の美術

13:30~14:00

—イタリア人とドイツ人の視点

講師：長谷川 純子（ドイツ館 学芸員）

この講座では、イタリア、プロイセン（ドイツ帝国）、オーストリア＝ハンガリーの歴史的背景を理解し、第一次世界大戦中および戦後のヨーロッパの地政学にどのような影響があったかを探ります。特に、イタリアと連合国（イギリス、フランス、ロシア）が締結したロンドン秘密条約の背景とその影響を詳しく考察します。

さらに、戦間期のイタリアとドイツの美術動向や、戦争が美術に与えた影響を紹介し、両国の美術に対する姿勢の相違についても掘り下げます。

板東俘虜収容所のイタリア人

14:00~15:30

—なぜ「味方」が収容されているのか

特別講師：土肥 秀行（東京大学 文学部 准教授）

板東俘虜収容所には、跡地に「ドイツ館」が建てられたように、多くのドイツ人がいました。しかしおよそ千名の収容者のなかには、ドイツ語すら話せないイタリア人も数名含まれていたのです。一次大戦時、日本とイタリアは同じ側で戦っていましたが、なぜ「味方」のイタリア人が捕虜となっていたのでしょうか。そしてそれが問題となったときどうしたのでしょうか。いまではマイナーなトピックこそ、戦争を語る上で重要とされています。というのも敵・味方にわけることのできない存在をも巻き込み、多くの矛盾を抱え込むものが戦争と考えられているからです。そしてその矛盾は、たとえ戦争が終わっても、なかなか解くことはできません。今回はそうした一筋縄ではいかないテーマについて考えてみましょう。

特別講師プロフィール

土肥 秀行（東京大学文学部准教授）

東京生まれ、京都在住。一次大戦期にドイツに捕らえられていたイタリア人捕虜による「収容所文学」を研究。イタリア人捕虜については、ANRP（イタリア人捕虜会・家族会）の求めに応じ記事を書き、『立命館言語文化研究』に伊語論文、またメンバーとして所属する POW 研究会（戦争捕虜研究会）にて講演会を行ってきた。これまで現代イタリア文学を研究し、大学では「イタリア語イタリア文学研究室」を主導。



場所

鳴門市役所 2階大会議室

（鳴門市撫養町南浜東浜 170）

入口は北側・南側玄関をご利用ください。

参加方法

申込不要・参加費無料



お問合せ先 鳴門市ドイツ館 088-679-9110